

心を病んだ人々は、なぜ閉じ込められなければならないのか？ 精神の病とは…、人間の尊厳とは…、いま突きつけられる問いかけ！



松沢病院の呉秀三胸像

呉秀三（くれしゅうぞう）は、今から百年前の時代に東京大学医学部精神科の教授として、異例の社会的な取組みを進めた先達者である。彼は精神疾患の人々が「座敷牢」に押し込まれる実情を憂い、その解決のために奔走した。その土台となった報告書『**精神病患者私宅監置ノ実況及其統計的観察**』を1918年に提起し、多方面へ働きかけた。それから1世紀の年月が過ぎた今、精神障害者の問題はどうかになっているのだろうか？

精神障害者をめぐる問題は一つの国の在り方を左右する重大なものであり、欧米でも改革が進められている。何故なら、

人口の1%プラスアルファが精神疾患を発症するという前提のもと、全ての国民が理解と対処を迫られているからである。

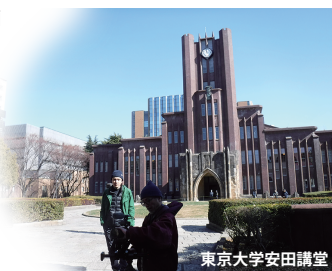
しかし、古い時代から現在に至るまで、精神病は誤解と偏見、差別の対象となり、この病を持つ人々と家族は苦しみと犠牲を強いられている。2017年12月の「寝屋川市監禁死亡事件」、2018年4月の「兵庫県三田市監禁事件」の報道は、多くの人々に衝撃を与えた。しかし、このような事例はまだ少なからず存在すると関係者は指摘する。こうしたタイミングで、この課題に一貫して取り組んできた精神医療保健の専門家組織である公益財団法人 **日本精神衛生会**と、障害者福祉の土台を支えて40周年を迎える **きょうされん**（旧称：共同作業所全国連絡会）が提携して製作したのが本作である。

長編第1作『**鳥の道を越えて**』で高い評価を得た**今井友樹**監督（工房ギャレット代表）が、先輩である**小原信之**カメラマン（民俗文化映像研究所代表）とタッグを組み、2003年の記録映画の最優秀作として注目を集めた夜間中学の



資料館の「拘束具」

記録映画『**こんばんは**』（毎日映画コンクール記録文化映画賞／文化庁映画大賞）の編集を担った**古賀陽一**編集マンを迎え、その『**こんばんは**』、重度重複障害児を育てる家族を描いたアニメ『**どんぐりの家**』（きょうされん20周年／山本おさむ原作・脚本）や、精神障害者の社会復帰を描く劇映画『**ふるさとをください**』（きょうされん30周年／脚本：ジェームス三木）で指揮をとった**中橋真紀人**プロデューサー（イメー



東京大学安田講堂

ジ・サテライト代表）のもとでパッションとパワーを注いだ。
呉秀三研究の第一人者・**岡田靖雄**先生（精神科医療史研究室代表／元・松沢病院医師）、「座敷牢」問題の調査研究を続ける**橋本明**先生（愛知県立大学教授）、日本の精神科医療のトップに位置する都立松沢病院の**齋藤正彦**院長というキー・パーソンへのインタビューを軸に構成された本作品は、これまでの100年を見つめ直し、これからの100年を考える貴重な映像的素材と言えるだろう。

作品の中に登場する資料には、現存する2冊のみの「私宅監置」報告書（1冊は岡田先生の手元に、もう1冊は国会図書館！）、呉秀三の初めての著作の初版本、家族にあて欧州から送った絵葉書（既に所在不明！）、秘蔵されていた数枚の写真（東大医学図書館に保管）などがある。日本で初公開！呉秀三の欧州留学先での足跡——彼が1900年前後に留学・視察したベルギーとオーストリア（ウィーン大学）に残されている「自筆の署名」を求めて海外ロケを敢行し、彼の下宿アパートもカメラに収めてきた。



海外ロケ（ウィーン）

今井友樹監督作品

勇気をもって前へ

立教大学教授 香山リカ
いつの時代も、社会を前に進めるのは、ひとりの気づきとそれに触発された大勢の仲間たちです。いまも心の病を持つ人たちが正しく理解され、その人権が十分に守られているとはとても言えません。

しかし、彼らが私宅監置などのもっとひどい処遇をあたりまえに受けていた時代に、呉秀三はそのおかしさに気づき、病者に治療と福祉の光をあてようとしたのです。私も本作から多くを学び、勇気づけられました。

夜明け前 呉秀三と無名の精神障害者の100年

〔ドキュメンタリー／2018年／66分〕



今から100年前
精神病に有効な
治療法が無かった時代
座敷牢に
幽閉された精神病患者を
救おうと奔走した
一人の男がいた

夜明け前

呉秀三と無名の精神障害者の100年

夜明けを迎える一助として

きょうされん専務理事 藤井克徳
「呉秀三を正確に知ってほしい」——本映画企画の最大の動機です。あの「座敷牢調査」から100周年という節目の力を借りて伝えたいのです。呉秀三の言動が現代日本にして何ら色あせることなく、そっくり今に通用しており、「この国に生まれた不幸」は、見方によっては当時よりも真に迫っているのではないのでしょうか。呉秀三の言動が名実ともに古めかしく感じられる社会をどう作っていくか、障害当事者や家族の一人ひとりが本当の夜明けをいかに実感できるか、本映画がその一助になることを願っています。

（日本精神衛生会理事）